

『龍殺し』

そこは乾燥した荒れ地だった。過酷な砂漠越えをする隊商の列を、電撃を飛ばす青い竜が襲っている。それを滅ぼしたものは商人ギルドから報酬が出る。そういう話だった。

陽炎漂う広い荒れ地に潜む竜を探すなんて厄介な事だ。

イリネアを始めとして五人の仲間、とりあえず最後に襲われた隊商の生き残りから、その場所を聞き出し何か手がかりはないかと探してみた。

ところが、こういうのは運がいいと言えるのだろうか？

重たげな鎧を身にまとい完全武装の、

つまり戦う事は得手であるが搜索など探し物など大して手助けにならないポルメリア目掛けて、地に潜っていた青い竜が不意打ちしてきたのだ。

仲間はただちに散開して間合いをとる。

それを確認する間もなくポルメリアは浮遊盾を起動し、愛用の大剣を振るって迎え撃った。

竜は電撃を吐き出して、初手でポルメリアを焼き殺そうとする。

しかし善なる軍神の加護のもと、天使の眷属として電撃などまったく受け付けない彼女に対し、それは有効な攻撃ではなかった。

仲間の援護など期待せず攻撃するポルメリア。それに自らの爪や牙で応酬する竜。

イリネアたちは離れた場所で寛ぐばかりだった。

「援護の魔法、かけてあげた方がいいよね？」

幸運の神に仕える僧侶である小人族のドウルワイトは、ただ見守るばかりの仲間問い掛ける。だが誰一人それを積極的に支持するものはいない。

「下手に低レベルの呪文で援護すると、あの光に消されるぞ」

ぶつきらばうに黒髪の魔法使いリュイシスがぼやく。

天使の眷属であるポルメリアは淡い光に包まれている。

眩しい太陽光が降り注ぐこの荒れ地では解らないが、前回倒した黒竜の住処である地下洞窟では非常に目立った。

敵をひきつけるしか能のない、迷惑な代物と誰もが思ったが、

案の定敵が来てドウルワイトとリュイシスが味方に援護の呪文を飛ばした時に、彼女の光の意味が解った。

その光は力の弱い低レベル魔法を無効化してしまうのだ。

力が弱いといっても破壊力の事ではない。

爆発の呪文も、電撃の呪文も高位術者が唱えれば圧倒的な破壊力を持つが、

呪文自体は初歩といっても良いレベルなので、ポルメリアの光に消されてしまうのだ。

その後のポルメリアの活躍を思い出して、イリネアは呟いた。

「なーんで『城砦落し』って言われているのか、解ったわ。彼女、一人で軍隊並の破壊力を持っているのよね」

その時、彼女たちが倒そうと挑んだのは珍しく人を支配しようとする黒竜だった。彼が何故、人間の村々を支配しようと思ったのか解らない。

だが洞窟にはホブゴブリンやオークの警備隊がおり、全てが良く訓練されていた。これなら人間の諸侯の軍勢と戦う事もできただろう。

戦はともかく黒竜と正面から戦う事のできる人間の軍勢はない。

それで竜殺しを専門にやっているイリネアたちのグループにお鉢が回ったのだが、侵入して発見され、敵と交戦した途端、もはやポルメリアの独壇場だった。

彼女の重装鎧と浮遊盾の防御を突破する事のできる兵士はほとんどおらず、

彼女の太剣を防ぐ盾も鎧もなく、まるでバターにナイフをいれるように、あつという間に切り裂いていく。

こういう洞窟には罠が仕掛けられているものなのだが、

それを解除するはずの盗賊上がりのクレドネエも、まったくもって手持ち無沙汰だった。

彼女は文字通り、罠を踏み破って先に進んでいくのだ。

落とし穴に落ちたり、石が落ちてきたり、槍が降ってきたり、爆発したり、とまあ色々な殺人罠が発動したが、ポルメリアには何一つ致命傷にならなかった。

それが善なる軍神の加護というものだろうか？その上、治癒の呪文を受けなくても傷が急速に塞がっていくのだ。

これでは他の仲間のやる事はない。何もなくても敵をなぎ払い突っ込んでいく。

とうとう黒竜のいるところまで行ってしまったがポルメリアは立ち止まりもせず、そのまま撃ってかかる。

出会い頭に酸を吐きかけられたが、それでもまったくの無傷だった。

「いいよなー、あそこまで何でもかんでも無視できるなら善なる軍神の使徒とやらになってみたいぜ」

罠解除に失敗すれば即死か瀕死の傷を受けるクレドネエにしてみれば羨ましい限りだ。

いや、クレドネエだけではない。ポルメリア以外は皆、常識的な人型生物だ。酸を浴びれば全身が焼け爛れる。

怪我をすれば自然に傷口が塞がる事もない。

だが仲間達は誰も感心しなかった。ただ冷ややかに力の限り黒竜と戦うポルメリアを見るだけだ。

「イリネア、弓矢で援護しないのかい？」

ドウルワイトが尋ねる。しかしイリネアの返事は冷たかった。

「いらないでしょ。そんなの邪魔なだけよ。あの娘の剣は確実に黒竜の鱗を貫いている。

でも黒竜の爪も牙もあの娘には届いていないわ。勝負あったのよ」

黒竜は、これだけの住処を構えるにしては、竜にしては小柄だった。

それほど歳をとっていないようで、にも関わらず支配欲だけは旺盛だったらしい。

知恵を巡らしてホブゴブリンとオークを従え、人間の諸侯に挑んだ。

だが堀を巡らし、高くそびえる城壁で囲われた城を幾つも陥落させたポルメリアにとっては、物の数ではなかったということだ。

戦いはあっけなく勝負がついた。『城砦落し』の完勝だった。

あれを見てしまったら、一体どんな事を彼女にしてやれるというのか？彼女はたった一人で竜の根城を滅ぼせるほどの存在なのだ。今現在荒地地で襲い掛かってきた青い竜とも互角以上に殴り合っている。仲間と言っても四人にしてやれる事なんて、ない。

「クレドネエ、今のうちにあの青い竜のねぐらでも探してきたら？時間がはぶけるよ」

イリネアは退屈そうに眼帯で隠されていない右の青い瞳をクレドネエの褐色の頭に向けた。

「それで竜が俺の方に向かってきたら、ドーすんだよ？おらあ死にたくないぜ」

クレドネエはおどけ者よろしく、派手な身振りで拒否した。

「いくじなしね」

「盗賊稼業は臆病なくらいが調度いいのさ。命のやりとり切ったはったは、あちらの騎士さまに任せる」

とはいえども、仲間たちの心の中は忸怩たるものがあつた。

自分たちの中でもっとも強力な戦士であるとはいえ、もっとも年下のポルメリアのみに戦わせる事に良心がうずくのだ。

しかし彼らにできる事など何もない。中途半端な援護は返って迷惑なのだ、無言で戦う彼女の後ろ姿は言っているようだ。

ドウルワイトは探るように仲間を見る。イリネアとリュイスは明らかに不服そうだ。

クレドネエはもともと戦いに不向きな事もあって仕方ないと諦めている様子でもある。

「いいじゃねーか、楽ができてよ」

クレドネエの言葉に、本気で言っているのかと三人の視線が集まる。クレドネエは唇を歪めた。

「本当の事だろう？なら、しょうがない。」

地下洞窟の黒竜も、今やりやっている青い竜も、ポルメリアちゃんの相手にゃ役不足だった、って事で。

次回はもっと手ごたえのある奴を探そうや」

「・・・そうね。しょうがないわね」

イリネアはそう言って自分の膝を抱き寄せて、戦っているポルメリアの方に視線を戻した。

だが納得などしていない事は、彼女の残された右目を見れば解る事だった。

その時、何か嫌な音が聞こえてきた。四人は揃ってポルメリアの方を見る。イリネアが小さな声をあげた。

白茶けた大地に赤黒い飛沫が散った。竜のものではなかった。

まったくもってポルメリアにとつて不運な一撃だった。

彼女の鎧の隙間を貫通した竜の爪が、脇から胸にかけて彼女の肉を引き裂いたのだ。

彼女にしては珍しい不覚だった。その強烈な一撃で弾き飛ばされ、不様に大地に転げる。

傷は猛烈な速さで治癒する。しかしそれは予想外に深く、完治するには相当な時間が必要だ。

ポルメリアに手傷を負わせられた続けた青い竜がそれを待つはずがない。かさにかかつて猛烈に攻撃してくる。

彼女は完全な受身になった。

いつもならば鉄壁の守りを誇る彼女の受け太刀だが、受けた傷の痛みが響くのか、防御は崩されがちになる。大変まずい状況だ。

だが咄嗟に仲間達は彼女を援護する事ができなかった。

イリネアの弓には弦が張っていなかったし、リュイシスやドウルワイトも呪文を選び出すのに手間がかかる。正面からの戦闘に向かないクレドネエなど駆けつけるだけ無駄だ。

そうするうちにもボルメリアは片膝をついて崩れた。そのまま力任せに殴り続けられれば八つ裂きにされてしまうだろう。焦る仲間の準備がようやく足並みそろった頃だった。

青い竜の攻撃を凌ぎながら、ボルメリアは自分の傷が回復するのを待つつもりだった。しかしそんな時間など竜が許すはずもない。何か思い切った手を考えなければジリ貧になってしまうと思つた時、彼女は竜の背後に何か白いものが動いたと感じた。そして太陽光を反射してきらめく重々しい何かが振り下ろされる。

竜が振り返る間もなく、それは竜の頭に振り下ろされていた。骨が砕け、肉が潰れる音が乾いた荒野に響く。竜はたったその一撃で息絶えてしまった。

自ら流したものと竜の返り血に赤く染まったボルメリアが仰ぎ見た者は、彼女と同年代の幼いと言つてもいい白髪の少年だった。重装鎧に身を包み完全武装のボルメリアに比べると彼の鎧は呆れるほど貧弱で、竜とともに打ち合えば易々と引き裂かれてしまうだろうと思う。

しかし彼が持つ、竜の頭を一撃で粉碎した剣を見た時、その場にいる誰も口が開いたまま塞がらなかった。

とてもではないが人間が手にもつて振り回す代物ではない。両手用の剣である事は理解できる。

ただその大きさは桁外れだ。まるで巨人族の戦士が振り回すような、そんなデカイ剣を少年は携えていた。

「……『城砦落し』も無茶な奴だと思つたが、それに輪をかけて無茶苦茶な奴だな……」

苦々しくウンザリした口調でリュイシスが呟く。

「人間って常識はずれですよねぇ……」

体の大きさから言つてドウルワイトには絶対無理な事である。感心した様子で彼は言うしかなかった。

「ああいうのも一種の芸だよな」

クレドネエは妙な感心の仕方をしている。

そしてイリネアはというと、彼の姿を確認すると何も言わずに二人の元へ駆け出していた。

三人は互いに顔を見合わせ、訝しく思いながらも後を追った。

「どーしたんだ?」

クレドネエは小首を傾げる。

「生き別れの弟とか……」

ドウルワイトは当り障りのない適当な事を言う。だがそれはリュイススによってきっぱり否定された。

「そいつはないな。だってあいつの家族、皆死んじまっているから」

「あらま」

「まあ、珍しくもないか・・・」

戦いが満ち溢れる世界において、戦場となった村々の人々が一家離散になる事は珍しくなく、現にクレドネエは天涯孤独の身の上だ。リュイススとて実の親の顔などおぼろげだ。

生きているのは知っているが口減らしで外に出されて以来、会った事はない。彼は運のいい捨て子のようなものだった。ドウルワイトは自分たちの種族が人に比べれば幸せな日常を送っているのだと今更ながら思い出した。

危うく竜の死体の下敷きになるところだったポルメリアは、久し振りに重傷を負った体で大儀そうに立ち上がった。激しく血が失われていて眩暈すらする。だが助けてもらった礼はせねばならない。

白髪の少年はポルメリアの事など無視して竜の死体を調べている。

彼女がやっとの事で言葉を吐き出しても、注意を向ける事すらしなかった。

「助けていただいた事は感謝する。しかし・・・」

その無礼さに内心腹を立てる。少年はそんな彼女の感情など無視していた。

「助けた覚えはない。竜を殺したらあんたを助けた事になった。それだけだよ」

「この青き竜は私と戦っていたのですがね」

傷が治り痛みが引くにつれてポルメリアは少年を観察する余裕が出てきた。

年の頃は彼女と変わらない。背丈もそれほどは変わらず、どちらかという和小柄な方だろう。

背中に背負った巨人用の巨大な両手持ちの剣が不釣り合いだ。軽装の鎧を着て盾は持たない。

他に荷物らしいものはなく巨大な剣さえなければ、戦から戦に渡り歩く一匹狼の傭兵のようにも見える。幼い顔立ちに笑みはなく、険しい孤独の表情のみが窺える。

いや、一つだけ見覚えのあるものがあつた。鎧に北方の荒野で暮らす蛮族の印が記されている。

誇り高き大鳥の翼。それは彼女がランキン侯の騎士団に属していた時、何度も戦い、あるいは協定を結んだ相手だった。

「貴方は・・・ルトロウの出か」

彼はポルメリアの言葉に初めて興味を示した。黒い瞳が訝しげに彼女を見詰める。

「どうして解る」

「大鳥をかたどった記章はルトロウ十二氏族のものだ。何度も戦い、何度も話合いをした相手だ。忘れる筈がない。もともと、私は一介の騎士に過ぎなかったが」

「俺とそんなに歳も変わらんように見えるが、授爵しているのか。よっぽど人手不足の騎士団だな」

少年は鼻で笑った。彼こそ何も知らないのかもしれない。

傷は癒えたが血の足らぬポルメリアは剣を支えにしながらも胸を張った。

「我が名はポルメリア・ランキン。かつて我が仕えしはランキン侯騎士団。北の諸侯を睥睨せしもの」

「ランキンといえば北の大国だな。まあ、どうでもいいけどな」

少年はそれっきり彼女に対して興味を失ったようだ。

確かに、今の彼女はランキン侯騎士団に属していないし、ランキン侯国にも仕えてはいない。どうでもいい事であるといえばそうなのだ。

彼女は自分の意思でここにいるのだから。

自分が場違いな事に胸を張ったと思ったポルメリアは、やや気落ちしてしまった。

自分自身で騎士団の栄達を投げ出し、侯爵の血脈も捨てて流浪の旅をしているのだ。出自を誇るなど愚かな話だ。

そこへイリネアが駆けつけてきた。

少年は警戒するように彼女を見るが、武器の用意をしていないと見たので剣に手は触れなかった。

イリネアの様子は明らかにおかしかった。

何故か彼女は長い間亡くしたとばかり思っていたものを見つけたように、酷く興奮しているように見えた。

「あんた、ルトロウ？」

「今日は良く生まれを言い当てられる日だな……」

少年は面白くなさそうに呟く。だがイリネアは激しく問い詰めた。

「答えなさい！私はルティス。ルティスのイリネアよ。あんたは？」

「ガーディだよ。ガーディのトゥルス……って、あんた、同族なのか？」

少年の答えにイリネアの右の瞳から涙が溢れ出た。歎極まり彼女は両手で口を抑え、短い嗚咽を漏らした。

これには少年はおろか駆けつけた三人もうろたえてしまった。

イリネアは気丈な姉御肌の娘だ。こんな風に泣き崩れる事など今まで一度もない。どうしてそうなったのか。

ポルメリアだけがそれを言い当てた。

「ルトロウは、滅びた民族だ。あの日、パリエーの伯爵領とともに」

クレドネエが小さく合点した声をあげた。トゥルスと名乗った少年が唇を噛みうつむき加減で震えている。

イリネアの嗚咽は止まらなかつた。乾いた大地に悲しい声が響いた。

青い竜の住処を探し、その宝を漁る事は翌日に繰り越された。

泣き腫らしたイリネアが落ち着いたのが日が傾いた頃だったので、その場で野宿するしかない。

焚き火のこちら側で男三人が固まっている。比較的長い付き合いだ、その実イリネアの事を何一つ知らなかつた男達三人だ。

彼らは焚き火の向こう側で話し込んでいる三人を遠くから見守る他に術がなかった。

「ルトロウってのは、なんなんだよ」

リュイシスが呟く。この中でイリネアとの付き合いは最も長い。誰よりも彼女の事を知っているつもりでいた。だがルトロウというのは初耳なのだ。何だか裏切られたような面持ちでリュイシスは誰に問うともなく呟いている。

それに答えたのは意外にもクレドネエだった。

「北の遊牧民さ。始祖を同じくする十二の氏族の総称。

国境を無視して放牧や狩りに適した場所を求めて移住し、定住の民の集落を見れば、

取引したり場合によっては略奪したりと、まあ北の諸侯にとっては頭痛の種ってところだったのかな」

「よく知っているねえ、クレドネエ」

ドウルワイトは驚いて感心する。クレドネエはおどけて見せた。

「下世話な噂話にや敏感なんでね。

確かにルティスもガーディもルトロウ十二氏族に数えられているが、まさかこんなところにいるとは思わなかったぜ」

『『城砦落し』が滅びた民族、とか言っていたな。あれか？ランキン侯爵に滅ぼされたとか』

リュイシスは探るようにクレドネエを見る。もしもそうであるならば厄介な話だ。

滅ぼした者と滅ぼされた者が一つの仲間になる事など、ありえない。

だがクレドネエは即座に否定した。

「なら、あそこで仲良くお話す筈がないじゃないか。

『城砦落し』がランキン侯爵のお姫様だった事は、隠れもない事実だ。イリネアは仇を仲間に入れるほど酔狂な女じゃない」

「じゃあ、どうして滅びたのさ？」

ドウルワイトの質問にクレドネエは記憶の底から思い出そうと眉をひそめた。

「こいつは噂だがね・・・三年前にパリエーの伯爵 領が一夜にして滅びた事件があった。

ちょうどその頃ルトロウは、それまで北の覇者面しているランキン侯爵と小競り合いを繰り返していた。

ランキンにしてみれば、ためえ勝手に移動して略奪やら、農地に羊を放牧やらしていくルトロウが目障りでしかたなかった。

何度かの戦いの後、ランキンとルトロウの間で協定が結ばれ、ルトロウはパリエーの伯爵領へ移動する事になった。

パリエー伯にしてみれば大国ランキン侯爵と戦う力のあるルトロウの存在は一種の安全保障になるわけだ。

幸いパリエーの領地はそれほど開墾が進んでいないから、遊牧の民を収容する土地はある。

それでとりあえずは治まった話だったんだが、その直後、パリエー伯爵領は一夜にして焼け野原になってしまったっていうのさ。噂によれば巨大な赤い龍と何人かの魔法使いや戦士が派手な空中戦をやらかして、そのとばっちりで滅びたともいう」

「じゃあ、ルトロウの人々は落ち着き先が決まったところで、そのとばっちりを受けたって事か・・・運がないね」

幸運の神の僧侶であるドウルワイトにとっては救われがたい悲惨な話である。

彼は幸運の神の聖印をまさぐり、不運避けの祈りを呟いた。

「あの二人は、その中の幸運な生き残りって訳か」

だがそう呟いたドウルワイトの言葉にリュイシスは賛同しなかった。

「どうかな？この世の中には死んだ方がマシって境遇もあるんだぜ」

「それがイリネアの過去なのかい？」

ドウルワイトの質問にリュイシスは答えなかった。ただ黒い瞳が咎めるようにドウルワイトを見ている。ドウルワイトはおどけて肩を竦めた。

焚き火の向こうではイリネア、トゥルス、ポルメリアが座っていた。喋っているのはもっぱらイリネアだった。涙を拭った彼女は年頃の娘よろしく陽気に話し続けた。懐かしい自分の氏族の事や集落の事、狩りの話や羊の群れの話。それは本当に些末な事で、つき合わされているトゥルスはあまり面白そうではなかった。

ポルメリアは、自分が二人の邪魔になるのではないかと思ったがイリネアにとつては反応が芳しくないトゥルスだけでは間が待たないようだ。話の半ばは部外者のポルメリアへの説明に終始した。それは初めて見るイリネアの歳相応の笑顔だった。

しかし、ポルメリアには酷く違和感を覚えることだ。彼女はポルメリアの『正義感』を嫌っていたし、仲間に加えてもそれほど親しく付き合っている訳ではない。女同士で宿では相部屋になる事もあるが、こんなに喋りかけてくる事はまずなかった。

トゥルスは何故イリネアの堰を切ったようなお喋りに付き合わなければならないのかと困惑し、迷惑にも感じているようだ。それに気づいたポルメリアは彼女のお喋りに口を挟む事にした。

「イリネア、申し訳ないが・・・」

「なに？」

「私は少し戸惑っています。貴女は私と馴れ合うつもりはなかったようだし、他の仲間達ともこんなに話をした事はなかった。それが今、同族のトゥルス殿に会ってこんなにも・・・。確かに貴方がたは滅びた民の生き残りであるし、同族同志会えたというのは喜ばしい事だろうとは思う。しかし・・・」

「・・・私のはしゃぎ過ぎだっと思って言いたいのね」

イリネアはふと右の青い瞳で笑った。

「そうね。確かににはしゃいでしまったわね。トゥルス、あなたには迷惑だったかも知れない。でも解って欲しいの。部族を、家族を失ってから、私がどんな人生を歩んできたのか」

イリネアの声が沈んだものになった。トゥルスの視線も伏せ気味になる。

二人はお互いの境遇を思い返し、同じ感情を共有したようだった。

「確かに全てが変わってしまった。あの日、あの夜、あの赤き龍が現れてから・・・」

トゥルスの黒い瞳が上目遣いにイリネアを見る。彼女の青い瞳は急に光を失った。それは澄んだ深い淵の水面のようで、冷たく静かで動かない。

「『城砦落し』、三年前、あなたが騎士団を離れた直接の理由はなんだったの？」

イリネアは急に話の矛先をポルメリアに変えた。僅か十二歳で彼女が騎士団を抜け、一人旅立った理由。それはまったくポルメリアの個人的な予感だった。彼女は淡々と答えた。

「・・・ある夜、山の向こうに赤い空が広がった。激しい振動と轟き渡る音が騎士団の宿舎にも響いた。その時、私は得体の知れない巨大な龍がうごめくを感じて戦慄を覚えた。数日後になって伯爵領の三つの都市が消滅した事を知った。」

「私が旅立った理由は、この世に何かとてつもない悪意を持った存在があるのだと知ったからです。それを滅ぼす事は善なる軍神の下僕として生まれた私の使命だと、その時思いました」

イリネアは鼻で笑った。トゥルスは舌を鳴らした。

二人とも善なる軍神に敬意を払っていない事は明らかだったが、ポルメリアはそれを咎める事はしなかった。

自分の正義を他人に押し付ける事は良い事ではない。良かれと思ってした事が他人の為になるとは限らない。それはイリネアたちが教えてくれた事だ。

「なるほど。じゃああなたは、パリエーの地ごと私たちルトロウを滅ぼした相手を倒す為に旅に出たという訳ね」

イリネアがやや皮肉っぽく言う。ポルメリアはそれも否定しなかった。

「国一つを一夜で滅ぼすものを倒すなど、今の私には手が余る。だから今はそれを滅ぼす為の修行なのだと考えています」

「・・・悠長なこったな」

トゥルスが苛立ち吐き出すように呟く。しかしポルメリアは動じなかった。

「確実に殺せる算段がつかなければ、仕掛ける意味がないのです」

「そうそう。じゃないと今日のポルメリアちゃんみたいになっちゃうわよね」

イリネアがからかうように言う。ポルメリアは恥じ入るように顔を伏せた。

「・・・そのとおりです」

「次は私の話ね」

そう言うが早いのか、イリネアが左の眼帯を外した。

この行為には焚き火の向かい側にいた仲間も驚いたが、彼女はかつて左目があった醜い傷跡を怯みもせずさらした。

「それが？」

トゥルスが確認するように尋ねる。

「何が起こったか、最初は理解できなかったわ。突然の突風に私と家族はテントごと吹き飛ばされた。気がつけば周りは熱風で焼け爛れた後で、私は黒焦げになって苦しんでいる兄弟たちの下敷きになっていたわ。もちろん無傷じゃなかった。左目はその時飛んできた木片でなくなった。」

一緒に行動していたルティスの氏族も三分の一がやられたわ。家畜たちはもつと酷かった。五体満足な羊は半分もいなかった。

けれども生き残った者たちは、その事を喜べなかったわね。

数日後、オークやらゴブリンどもが家畜を奪い、仲間達を殺し、止めに同じの人間の盗賊どもがやってきた。

動けない者や老人は殺され、あとは皆奴隷として売られた。若い女や子供たちは、その前に連中のお楽しみに供されたわ」
イリネアの暗い微笑みにポルメリアは戦慄を覚えた。焼け出され家族を失い、財産である家畜も失った彼女は、同じ人間によつて最後の奈落に突き落とされたようなものだ。

彼女にしてみれば、ポルメリアがしてきた行為は安っぽい自己満足に過ぎないのだ。

「左目の痛みがひいて、片目で動く事に慣れてから、私は売春窟から逃げ出した。

弓矢を手に入れ追手を全て殺して、私の奴隷時代に関わった連中を全て始末して、そして今は旅をしている。

噂で聞いた、この惨劇を引き起こしたもの。赤き龍を探し出し、そして殺す為の旅を。

トウルス、あんたもそうなんじゃない？」

白髪の少年は伏せ目のまま黙っていた。その暗黒をはめ込んだような闇色の瞳は何の感情も浮かばない。

だが再び上目遣いにイリネアを見た彼は挑むような口調で言った。

「噂なんかじゃない。俺は見たんだ。一瞬にして俺の全てを奪ったものを」

彼の脳裏に浮んだものは、一瞬にして灼熱の地獄と化した自分の一族の野営地だった。

その遥かな頭上には巨大な赤黒い龍と何人かの人影が激しい空中戦を行っていた。

トウルスの一族はたまたまパリエーの都城近くにいた。

ランキンとの争いに忙殺されてさばき切れなかった羊毛を処分する為、定住民の都に近付いていたのだ。

よほどの富裕者か夜の商売でなければ日没と同時に就寝してしまう。

だから夜半に起こった突然の災難に、家族の多くは眠ったまま即死してしまった。

小柄なトウルスはたまたま運良く生き残ったに過ぎない。

だが本当に運が良かったのか疑問に思う。

三年前の彼が目撃したものは、絶対的な恐怖だった。

巨大な赤き龍の姿は幼いトウルスには剥き出しの暴力そのものに映った。

その龍の一雉ぎが、空中戦を戦っている人々に向けられたものだとしても、

その余波が遥か彼方の山々を、大地を蹂躪しているのは彼にも解った。

ルトロウは、特にガーデイは類稀なる戦士を輩出する氏族である。

ランキンとの闘争でも彼らの騎士団と最も激しく刃を交わしたのは彼らだった。

筋肉を剥き出しにし、輝く重装鎧に身を固めたランキン侯の騎士たちと互角に戦う戦士たちは賞賛的であり、彼らの活躍がランキン侯に譲歩を迫ったと言えた。

トウルスもそれに憧れた。あと五年もすれば成人を迎え、戦士として認められる試練を受けるだろう。

それを見事克服し、ガーデイの戦士たちの仲間に入る事が幼い彼の夢だった。

だが龍はそんなものを消し飛ばしてしまった。

優秀な戦士であった父も兄も一瞬にして死んだ。兄に劣らず力自慢で、

大人の羊を両脇に抱えて運ぶ事さえできた姉も優しい母と共に息絶えた。

小さくて未熟な彼は、それを知らながら中空に浮び空を飛ぶ人々に猛威を振るう赤き龍に対し何もできなかった。ただ、その禍々しい姿に射すくめられて怯え、震え、泣きわめく事すらできずに絶句するしかなかったのだ。

中空での龍と人影との激しい戦いがどうなったのか、最後まで彼が見届ける事はなかった。気が付けば冷たい雨の中を、一面の燎原の中にいながら不思議にあまり火傷を負わずに倒れていた。

激しい雨は黒く焼け爛れた大地を濁流のように流れ、全てを洗い流そうとしていた。一面に焼け焦げた死の匂いが充満する。彼の心を満たしたのは家族を殺された復讐心ではなく、全てを失った孤独の寂しさ、恐怖だった。

その後も、自分が一体どうなったのか良く覚えてはいなかった。

ただ焼け爛れた山野を、腹を空かせて一人さまよい歩いた事だけは確かだった。

不意に巨大な剣が突き刺さった場所に出くわした。察するにそれは巨人たちの集落だったのだろう。

彼らも龍の戦いに巻き込まれたのか、家は焼かれ、黒焦げの巨体がいくつも転がっていた。

よく見れば巨大な死体は何者かに食い荒らされた後だと言う事に気づいただろう。

だが腹を空かせた子供に過ぎなかった彼は何も気付かなかった。

何か食べるものはないだろうか？大きな家の中を覗いてみるが食べられそうなものは何もない。

落胆して外に出ると愕然とした。何時の間にもやら狼の群れが彼を待ち構えているではないか。

武器のない、腹を空かせた子供にできる事など逃げる事しかない。

狼たちはそれを見越して、なぶるように吠え立て彼を怯えさせ、追い詰めていこうとする。

武器と言えば巨人用の、地に刺さった大剣しかなかった。

無我夢中だった。トゥルスとてそれが扱えると思つて飛びついた訳ではない。

ただ、死にたくない。その一心で大きすぎるその剣を取り、飛び掛つてくる狼に向かつて振るつた。

巨大な剣。それは大きな鉄塊だ。扱いにくいものではあつたが当たれば絶大な破壊力がある。事実狼は一撃で挽肉になつてしまった。目の前で仲間が潰されるのを見てしまった狼たちの動きは怯む。

半ば狂乱状態に陥つたトゥルスは意に介さず、夢中で大きすぎる剣を振るう。

息があがり力尽き、その場に座り込んだトゥルスが見たものは、少なくとも五匹の狼たちの、無残に砕け散つた死体ばかりだった。

別の巨人の家にあがり、僅かに残つていた干し肉を口にして、狼たちに襲われないよう背の高い巨人達の臭いベッドに登る。

何とか安らかな眠りを得た彼は、翌朝巨人たちの井戸から水をくみ上げ、水鏡で自分の顔を覗き込んで愕然とした。

彼は元々黒髪の少年だった。南で略奪され父の妻となつた母に似て、彼の髪は北の民には珍しく漆黒だった。

その艶やかな髪が珍しく、自慢げに手入れをしてくれた母の手がくすぐつたくて彼も密かに得意にしていたものだ。

それが、ない。

あるのは恐怖に色あせた真つ白な髪だけだった。

痩せこけた頬も薄汚れた顔にも驚いたが、それよりも何よりも白い髪はそれまでの自分とは完全に異なるものだった。

これはなんだ？これが本当に自分なのか？この病にとりつかれたような変わり果てた子供が？

その時、トゥルスは自分が絶望の絶叫を山々に響かせた事を覚えている。あの赤き巨龍は氏族、家族はおろか自分の姿形までも奪っていったのだ。

・・・しかし、トゥルスは二人には何も言わなかった。ただ唇を噛み、手が白くなるまで握り締められている事だけが、全てを語っていた。

「赤い巨龍。私たちの目的は一つだと思わない？」

眼帯をはめ直したイリネアがトゥルスに尋ねる。しかしトゥルスは答えない。再びうつむき加減になり、黒い瞳は暗い地面を見ていた。

イリネアは続けた。

「私はこのままですませるつもりはない。私の人生を破壊してくれた、あの赤い巨龍を滅ぼしてやるつもりよ」

彼女の青い瞳に再び明るい光が灯った。その言葉も嬉しげで挑戦的だった。その時、ポルメリアは悟った。イリネアは復讐を楽しんでいるのだ。だからポルメリアとは異なる青い瞳でいられる。

彼女には無理だった。例えば相手が許しがたい悪党であったとしても、自分が奪う命の重さを思うとき、とてもそんな気分にはなれなかった。

トゥルスは、上目遣いにイリネアを見た。あまり感情のこもっていない目だ。イリネアの不敵な物言いに感銘を覚えた様子はない。

「あんに何ができるんだ。その弓矢で奴を射抜く事ができると？奴を滅ぼすには鉄塊が必要だ。これだけで十分だ」

「大した自信ね。一人で何でもできると思っているみたい」

イリネアの揶揄にトゥルスは不快感を表した。だが彼が何か言う前に、唐突にクレドネエが口をはさんだ。ふと思いつ出した。そんな口調だった。

「そりゃドラゴン相手なら臆する事はないわな。『龍殺し』なんだから」

一瞬全員の空気が戸惑い、そして動き出した。

『龍殺し』とは、ここ最近噂になりだした戦士の事だ。

たった一人で何匹もの竜を殺している・・・そういえば白髪の戦士だった。

大きな剣を振るい、さしもの竜も一撃の下に殺されてしまうという、しかしよくある与太話だと思われる。

人知を越えた存在である竜を一人で殺すなんて、そいつは神の使徒か悪魔の仲間か、どっちにしろ人間ではない存在でしかない事だ。もしくは伝説の英雄級まででないと、そんな事はできない。

例えばポルメリアがそうだ。分厚い鎧を着て軽々と動き回り、低レベルの魔法を受け付けず、悪を滅ぼす剣を持ち、傷さえも自己回復してしまう、ある意味完全無欠の戦士。

だがトゥルスはそんな存在には見えなかった。巨人の両手持ち剣を扱うのは、確かに常人にできる事ではない。しかし特別な魔法の守りを持っている訳でもなく、軽装の鎧で、そして普通の人間だ。ルトロウのガーディは卓越した戦士の氏族だが、あくまで人間同士の争いの話だった。

『龍殺し』なの？」

イリネアの質問にトゥルスは下らない事を聞いたと、鼻で笑った。

「そんな名前は知らない。ただ、俺はこれまで一人で竜を狩ってきた。そしてこれからも。誰かとつるむ気はない」
「いーじゃないか。行かせてやれよ。俺達には関係ない話だしな」

リュイシスが投げやりに言った。それに対してイリネアの反応は妙だった。
こういう話で感情をあらわにした事がない彼女が、立ち上がってリュイシスにくっついてかかる。
ドウルワイトとクレドネエは、そんな彼女を目にして面食らった様だ。

「余計な事を喋るな、リュイシス。パーティに前衛二人は必要だろう」

リュイシスは舌を鳴らした。

「嫌だつて言っている奴を無理矢理仲間にする事はないだろう？」

『城砦落し』とやりあっている最中とはいえ、一刀の下に青い竜を仕留めた。確かに凄腕だつてのは認める。
だが一人でいいつて言っている奴を引き止める意味があるかね？あるとすれば、お前にだけかな？」

言われてイリネアは怯んだ。そして何かを恐れるようにトゥルスを顧みる。彼はそんなイリネアの視線に気づかないふりをした。
少なくともボルメリアにはそう見えた。

「・・・あなたには解らないよ。故郷を自分から出てきたあなたには・・・」

イリネアは搾り出すように呟く。リュイシスはやや苛立っていた。

「そのとおり！俺の家族は故郷でピンピンしてる。貧しいけれども皆揃って地べた這いずり回って畑を耕しているぞ。
俺はガキの時に口減らして追い出され、ギブリンの都に出た。孤児院じゃ秀才だったんで魔法を学んだよ。
ところが魔法と言う奴は金がある。貧しい農家の貧しい農民の小倅、しかも追い出された奴にや、金のなる木は手元にない。
だからこうして旅に出た。魔物退治、悩み相談、策略のお手伝い。なんでもやったさ。お前にくっついてるのだからさ。
竜はお宝をしこたま溜め込んでる。連中を殺せば喰えるような金が入る！これで研究費用は一安心。」

だがな復讐なんて俺には関係ないんだ。一夜で国一つ滅ぼすような真正正銘の化物なんかとやりあう気は、これっぽっちもないぜ」
イリネアはリュイシスの言い草を苦しい思いで飲み込んだ。しかしその通りなのだ。彼は最初から金目的で仲間になった。
身を焦がすような竜に対する怒りは、彼の心にはない。彼女の復讐に彼が付きあう義理はない。

それはクレドネエにも言える事だ。なんとすれば彼は盗賊上がり。切ったはつたの戦いなどご免被るといふ性格だ。
彼ら二人は、復讐という彼女の目的に付き合う必要はない。

ドウルワイトはどうなのだろうか、イリネアは弱々しく小さな彼を見る。しかしドウルワイトは彼女の視線を避けた。
幸運の神の僧侶は日和見する事にしたのだろうか。

一人の戦士を仲間に加えようとして、今までの仲間が離れていこうとしている。

確かにイリネアは誰にも最終的な自分の目的を口にした事はなかった。
復讐なんて個人的な目的に誰が付き合うというのだろうか？そんな気持ちがあったからだ。

今自分と同じ思いを抱いている少年に出会って、イリネアは自分が思う以上にはしゃいでしまったのだろう。あげくに彼には断られ、仲間からは不信の目で見られている。

さすがに強気のイリネアでも落ち込んでしまった。自分は全てを失うかも知れない。半ばそう覚悟した時、彼女の涼しげな声が響いた。

「私は貴女とともにいきます。イリネア」

天使の眷属である少女の姿をした騎士は、はつきりとそう宣言した。

「私の使命は『悪』を滅ぼすこと。一つの国を丸ごと滅ぼすような巨大な敵に、私の刃が何処まで届くか解りません。しかしそれが我がさだめ。例えどのような運命が待ち受けようとも、私は貴女と共に悪しき龍を打ち滅ぼしましょう。

我が善なる軍神に賭けて」

ポルメリアのその言葉がどんなに嬉しかったか。

他の者には焼き火に浮かび上がったイリネアの唇がややほころんだ事ぐらいでしか解らなかった。

しかしイリネアの口から出た言葉は素直ではなかった。

「偽善なら不要よ。同情ならなむさら」

ポルメリアはそんな事で怯みも怒りもしなかった。ただ淡々と返事をするのみだ。

「これは私のお節介ではありません。貴女の望みが人々を救う事になるのだと考えたからです。

人が望む事をするべきだと教えたのは貴女ではありませんか？

人々の幸せの為に剣を振るうが我が望み。

同情がないとは言いません。しかし貴女の為になるのですから、不愉快な感情には目をつぶっていただきたい」

最後の言葉はポルメリア流の冗談だったのか？滅多に見せない微笑が、彼女の珊瑚色の唇に浮んだ。

それを見て笑い出したのはドウルワイトだった。呆気にとられている皆を尻目に、小さな体をくの字に折って爆笑している。最後に笑いすぎて涙を流した彼は苦しそうに言い出した。

「ごめんごめん。『城砦落し』、君がそんな事を言えるとは思っていなかったから、ちょっと入っちゃったよ」

ドウルワイトの言葉を聞いてポルメリアは少しばかり怒ってみせる。それはちょっとわざとらしくかった。

「失敬ですね、幸運の神の僧侶殿。私にだって洒落っ気はあります。皆さんにお見せする機会がなかっただけの事です」

「はいはい。そういう事にしておくよ。それはさて置き、イリネア。僕は君に付き合うよ。

幸運の神に仕える者として、自分の幸運を試さないというのは教えに反する。

不運なる者を助けるというのも教義の一つだし、それに我らの種族は義理固いんだ。・・・人間と違ってね」

ドウルワイトは意地悪く笑って人間の男三人に、それぞれ一瞥をくれる。

反応は三人それぞれだった。リュイシスは気まずそうに鼻を鳴らす。クレドネエは慌てて視線を逸らす。トウルスだけは端から相手にしていない様子だ。

ドウルワイトの緑色の視線は何故かトウルスで止まり動かなくなる。それに彼も気付いた。

「・・・なんだよ」

「いやあ。自殺志願者に同情して」

「どういう意味だよ」

「君では赤き巨龍に勝てないよ」

急に真顔になったドウルワイトははっきりと断言する。さすがにトウルスは顔に血を上らせた。

「なんでだよー」

「君たちの話を総合するに相手は二種類考えられる。一つは『地獄龍』。地獄の諸君主の中でも、その帝王と言われ恐れられている大悪魔の命令にしか従わぬ。地獄の火炎をまといし、その先触れ。

もう一つはリュイシスの方が詳しいかな。数千年を生きた歳経た赤竜。考えられる限りの叡智を持ち、邪悪なる竜族の母神にしか従わぬ存在。

どっちも伝説級の竜だ。そんな、ただデカイだけの巨人の剣を振り回すだけで勝てる相手じゃない。

そこのボルメリアは『城砦落し』と仇名される天使の力を与えられた騎士だ。

自分が頑丈だからって一人で先走って、あげくに今日みたいな失態を演じたけれど、僕たちは彼女がいくつもの城を落とし塔の魔法使いを滅ぼしたと聞いている。

先日だって地下迷宮にこもる黒竜を一人で滅ぼしたよ。幾多の罫を踏み破ってね。

それでも今日は青い竜に勝てなかった。

人ならぬ力を持ち、頭の天辺から足の先まで重装の魔法の道具でそろえた彼女にだって、砂漠の青い竜を倒せなかったんだ。

横から出てきて頭を潰したぐらいで得意になっている君が、一人で滅ぼせる相手じゃない。

敵は空を飛ぶ！全てを焼き尽くす炎を吐く。類稀なる魔法を投げる。

それを君一人で、どうやって克服するんだい？」

痛いところを突かれたようで、トウルスは歯を食いしばって悩んでいる。

確かに、ただの戦士ではない彼には、空飛ぶ敵を追いかける事すらできない。本当は解っているのかも知れない。剣の力で敵を殺し続けた彼の手法はあまりにも危険であるという事に。

畳み掛けるようにドウルワイトは言う。

「その点、呪文使いの仲間がいれば安心。空を飛ぶことも、炎に耐える事も、魔法をかわす術すら持っている。そうだろうか？リュイシス」

ドウルワイトの話の流れから、自分に振られる事が解っていたリュイスは、舌打ちをしてそっぽを向いた。それを見てドウルワイトは、やれやれと少しおどけて肩をすくめて見せる。そして構わず言葉を続けた。

「相手が何処にいるのか調べるのも大切だ。失礼ながらポルメリアじゃ何処へ行こうとすぐばれる。

クレドネエに聞いてみれば解るさ。彼はとても耳がいい。そして身のこなしも軽く、当然、竜の居場所を探るのだから得意だ。彼はこれまで我々が倒した全ての竜のねぐらを探し出している。ね？」

ドウルワイトはクレドネエにウィンクして見せた。

褒められるのは嫌じゃないが、ドウルワイトに持ち上げられるのが気持ち悪い。そんな複雑な顔をしている。

「彼はそれだけじゃないんだ。裏稼業に通じているから手に入りにくいどんなものでも入手してしまっ。

例えば、一滴で何十人にも殺せる猛毒の滴や、貴重な魔法触媒、

幽霊を殴れるようになる薬とか、火、冷気を武器に帯びさせる薬なんてもあったね。

当然竜殺しの毒とかも。彼には手に入れる事ができないものなんてないんだ。ね？」

再びドウルワイトはクレドネエを見る。どうやらクレドネエは褒められる事に弱いらしい。

今度は満更でもない顔をしている。そしてちらりとトウルスを盗み見た。彼は竜殺しの毒に興味を覚えたような顔をしている。

ドウルワイトは知らないふりをして言葉を続けた。

「このような頼りになる仲間君の剣が加われれば、

必ずや地獄の龍だろうと古の竜であろうと葬り去ること間違いないだと思っけど、どうかな？」

だが彼の言葉は違つところから否定された。言うまでもなくリュイスだ。

「俺はその赤い巨龍を殺しにいくなんて、言ってないぜ。ごめんだと言っているんだ」

「おやまあ、つれないねえ。君はイリネアとは一番古い付き合いじゃないか。彼女の仇は君の仇だと思っっていたのに」

言われてリュイスは思わずイリネアを見た。らしくなく心細げな彼女の姿を見て、彼は慌てて目を背ける。

視線の先にはドウルワイトがいる。彼の心を見透かすようにニヤニヤ笑っていた。

正直な話、リュイスは嫉妬しているのだった。

確かにイリネアとは長い付き合いだが、あんな無防備にはしゃぐ彼女を見た事は一度もない。

いつでも彼女は彼に心の中を覗かせなかった。そんな彼女に心を引かれているのはリュイスの方であって彼女ではない。

危険だの命を失うだの、儲からないのは二の次だった。彼女が誰かに心を開くのを見るのが嫌なのだ。

しかしさすがのように彼を見る彼女の青い瞳を見て、心が揺れ動いた。

開き直つてしまえば彼は彼女に惚れているのであり、彼女の希望をかなえてやりたいのも事実だった。

ドウルワイトの視線からも顔を背けると、今度は自分をじっと見詰めているポルメリアの視線に出くわした。

いつもの思いつめたような顔ではない。どこなく穏やかだ。

微笑みこそ浮んでいなかったが、天使の眷属に相応しい落ち着いた美しい顔だった。

リュイスには今のポルメリアが何を考えているのか読めなかった。

「何、見ているんだよ」

苛立ってそう尋ねる。ポルメリアは答えた。

「貴方が貴方にとって大切なものの為に決断するところを、見届けようと思って」

「余計なお世話なんだよ、つっぱしりめ。」

「だいたい、お前は、こっちが援護しようとしても、一人でとつといつちまうから始末が悪い。」

ドウルワイトの言うとおり、一人でやる事なんてたかが知れているんだよ」

リュイシスの文句は故意に話題をそらしたものだ。だがポルメリアは素直に受け取った。

「それは・・・反省しています。だから貴方にも力を貸して欲しい。」

クレドネエも、そしてトウルス、貴方にも。リュイシスの言うとおり、一人でやる事など限界があります。

現に私は貴方に助けてもらわなければ、死んでいたかも知れない。

改めて礼をいいます。そして私たちとともに行きませんか？力を合わせれば、より早く赤い龍を滅ぼせる。そうではありませんか？」

ポルメリアの言葉は途中からトウルスに向けられていた。

彼女は、リュイシスは結局イリネアを見捨てないと思ったのかも知れない。クレドネエは仕方ないという顔になっている。

残るはトウルスだった。龍に恨みを持ち、龍を滅ぼす少年だけだった。

より早く赤い龍を滅ぼせる。その言葉にトウルスは心を動かされたようだった。

彼の黒い瞳が迷っているのが解る。やがて思い切ったように口を開いた。

「・・・赤い龍を殺すまで。それまで付き合う。だがそれだけだ」

「それで十分ですよ。ねえ？クレドネエ、リュイシス？」

ドウルワイトが二人を見る。リュイシスは答えなかったが拒絶もしなかった。クレドネエは仕方ないと肩をすくめる。

「・・・まあ、俺たちは非力なんだから、危なくなったらとつとと逃げるぜ。死にたくないもんな」

「そりゃあ、命あつての物だねだもの。逃げる時は逃げるさ・・・あ、ポルメリアだけはダメか・・・」

ドウルワイトが気の毒そうに見るが、ポルメリアは首を振った。

「私は誰かの為に剣を振るうもの。皆の為になるなら、それでいい」

だがそんなポルメリアの言葉を激しく否定するものがいた。イリネアだ。

「バカな事言わない。皆仲間だ。危なくなったら皆で逃げ出すのよ。生きていれば、何とかなるんだから」

それは無理なのだ、ポルメリアと事情を知るドウルワイトは呟く。彼女は善の為に戦い命を捧げた者。

全滅の危機に陥れば、一番最後の仲間が逃げ延びるまで、その場に留まり時間を稼ぐ。彼女に残された道はそれしかないのだ。

だが二人はあえてその事を口にしなかった。

それが善なる軍神の下僕に与えられた宿命であろうとも、イリネアは納得しないだろうと思ったからだ。

だから、困ったように微笑みながら小さく、はい、と返事をするしかなかった。

「それじゃあ、決まりね。・・・皆、ありがとう」

信じられない事に、イリネアは深々と頭を下げた。

驚く仲間達が頭を上げると言っても彼女は容易に上げようとはしなかった。それが仲間に対する彼女なりと、けじめのつけ方なのかも知れなかった。

荒地で過ごした夜が明ける。最初の仕事は青い竜のねぐら探した。

結局彼らはお金儲けでやっているのだから、竜を倒して終わりなんて事にはならないのだ。

しかしそれは戦い、『悪』を滅ぼすことを生業とするポルメリアには関係ない事だった。

思えば彼女の旅も、禍々しき赤い空を見た時から始まった。

今こうして、その空の下から生還した二人とともに、大地を一瞬にして焼き尽くした赤き巨龍を滅ぼす旅を始めようとしている。

これが私の宿命なのだろうか？

乾いた大地を照らす眩い太陽を眺めながら彼女は思った。それを滅ぼす事が、私に与えられた使命なのだろうか？

しかし、彼女の神は答えなかった。